下北沢の文化を守り、人が中心の街並みを

２００７年1月１３日

原告　大久保青志

１　はじめに

私は、原告の一人大久保青志と申します。私は下北沢に住む者ではありませんが、下北沢の文化と人が中心の街並みを守りたいという理由により「まもれシモキタ！行政訴訟」の原告団に加わりました。

２　音楽・演劇を創造する文化の街

私は大学生時代に知り合った仲間と、「ロッキング・オン」という音楽雑誌を１９７３年に創刊、１５年近く音楽業界で仕事をしてきました。創刊当時は自費出版でしたので下北沢をはじめロック喫茶のある街を、販売店の拡大で回ったものでした（写真資料１）。

７０年代から８０年代の下北は今日のように若者が大挙して訪れるような街ではありませんでしたが、日本のポップ・ミュージシャンが各地から移り住み、音楽文化と演劇文化が混在する街として発展しようとしていました。特に日本でブルース・ミュージックを演奏するミュージシャンが多く集まり東京の中で独特の味を出していました。本多劇場の誕生は、東京郊外の街でしかなかった下北沢を変えたという側面があると思いますが、駅前に残る闇市的雰囲気と人間味ある街が音楽家達を惹きつけたのだと思います（写真資料２）。

そうした街の雰囲気はいまだに変わりませんが、住宅地の路地裏までブティックやカフェが立ち並ぶようになるとは想像もできませんでした。

しかし、現在のように路地裏に伸びた店舗や路上に溢れる人並みは、下北の街並みを大きく変えたわけではありません。狭い路地に溢れるような人々は、猥雑

のように見えるかもしれません、混乱のカオスが下北の街を覆っているかのように見えるかもしれません。でもそこには、一定の秩序があり文化があるのです。

シモキタ特有の音楽･演劇を創造する文化の街として発展してきたその原点は、シモキタが人間の街だからです。

シモキタは今も文化を創造し発展しています。今回の補助５４号線の建設計画と駅前再開発は、今日まで培ってきた下北沢という街を死滅させる試みです。音楽文化に身をおき、この街の文化を享受してきた一人として見過ごすことはできません。

３　人が中心の街並み

次の述べたいのは、元東京都議会議員としての立場からです。

私は１９８９年から１期、都議会議員を務めました。おもに都市計画環境委員会に所属しました。専門家ではありませんが、都市における環境保全とは「街づくり」にあると学びました。

その観点から指摘させていただきたいのは、現在の下北は文化の街であると同時に、人間が自由に路上を路地を行きかうことのできる街だということです。私は１９９２年ブラジルで行われた世界環境会議に自治体議員の一人として参加しました。そのとき訪れたのが、環境都市として世界に知られているクリチバ市でした。シティホールの周りでは自動車の通行は禁止、自転車と歩行者優先の区域になっていました。利便性より環境を優先する政策があるからです。

現在の下北沢は、道幅も狭く自動車の通行が困難な分、歩行者優先的な路上光景が現出しています。路地裏も狭く緊急時の対応が困難との見解が聞かれます。しかし、大型道路と駅前の再開発が災害に強い街だと言い切れるのでしょうか。自動車優先の街が生み出すのはシモキタ文化と環境の破壊です。災害時の対応に必要な区画整理は認めるとしても、再開発計画は下北沢の街並みと文化、人々が自由に行きかうことのできる計画として再考すべきです。

4　さいごに

私の職場は下北沢と同じ小田急線経堂にあります。

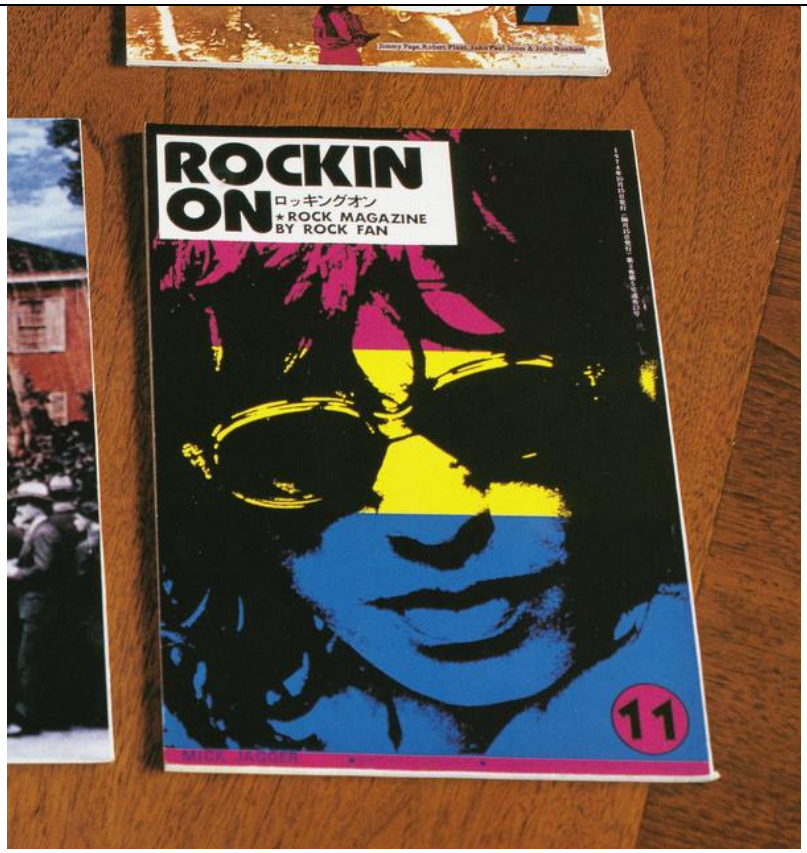
日々下北沢で起こっている新しい文化の動きに興味を持ち、平日の夜を休日の午後を享受している一人でもあります。

人間味ある下北沢の街並みが大型道路計画によって失われるのは目に見えています。

利便性を追求するあまり、シモキタ文化を死滅させることには耐えられません。

計画の変更を求めます。

以上



１．雑誌『ロッキング・オン』（１９７４年１１月号）

２．１９７９年の「下北沢音楽祭」
若者たちが本多劇場建設予定地を借りて開催した